

谷津まちづくりに関する実践研究

- 千葉県富里市の谷津を対象として -

日大生産工(院) ○戸田 祐希

日大生産工(学部) 渡邊 文弥 増田 大志 稲角 果音 萩原 弓利佳

日大生産工 永村 景子

1. 背景および目的

印旛沼流域を含む関東平野は、約 12 万年前の海底隆起と縄文海進期の沖積平野から成り、台地の辺縁に急峻な浸食谷(谷津)が多数存在する¹⁾。谷津は、水質浄化や水害リスク軽減、生物多様性維持、自然環境教育などの機能を持つ¹⁾。しかし、都市化の影響により谷津の埋立が進み、約 50%の谷津が失われた²⁾。現在、谷津の保全活動は個別に行われており、谷津の価値を認識している人は限られている。

本研究は、千葉県富里市の谷津を対象に市民の谷津への関心・認知を調査し、その実態把握に基づいた谷津認知度向上施策の実践を通じて得られた市民の意識変容や参加動機を分析することを目的とする。

2. 研究対象地概要

千葉県富里市は、印旛沼流域に位置し、谷津が見られる地域である。市民団体や企業、研究機関が土地所有者と連携し、谷津の湿地維持・再生が進められている¹⁾。さらに、谷津の環境保全や資源活用を目的とした地域活動も行われている³⁾。本研究では、天神谷津、おしどりの里(大谷津)、末廣谷津(末廣農場)、八ツ堀のしみず谷津を主な対象地とする。

3. 研究方法

本研究のプロセスを図2に示す。本研究では、市民の環境保全活動への関心や谷津の認知度、谷津来訪者の傾向を把握するため、2種類の実態把握アンケート調査を実施した。この調査の片方は、試験的施策への参加者を対

象に行ったものであるが、本稿では紙面の都合上、アンケート結果を4章、施策を5章にて言及する。また、試験的施策の実施とアンケート結果から、谷津認知度向上の課題を抽出し、谷津認知度向上施策を6章にて検討・試行・成果検証(アンケート)について述べる。



図1 富里市内の谷津

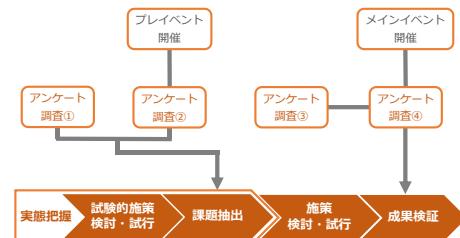


図2 研究プロセス



写真1 環境保全活動の様子

Action research on community design at the bottom of a small valley called Yatsu
- A case study of the yatsu in Tomisato City, Chiba Prefecture -

Yuki TODA, Fumiya WATANABE, Taishi MASUDA, Kanon INAZUMI,
Yurika OGIHARA and Keiko NAGAMURA

4. 谷津認知度実態把握(アンケート調査)

4.1 2種類のアンケート調査について

本研究では、谷津来訪者と一般市民の谷津に対する認知度を比較するため、2種類のアンケートを実施した。一般市民を対象としたアンケート調査(以下、アンケート①)は、富里市観光・交流拠点施設である末廣農場の利用者を対象に環境保全に対する意識や施設利用状況を調査した。谷津来訪者を対象としたアンケート調査(以下、アンケート②)は、イベント「チチ谷津ウォーク 2024 夏」(5章)の参加者を対象に谷津への関心や利用状況、環境保全への意識を調査した。

4.2 アンケート実施概要

アンケート①の対象期間は、2024年6月27日(平日)と2024年7月6日~7月7日(休日)とし、合計で72件の回答を得た。

アンケート②の対象期間は、おしどりの里(大谷津)では、2024年6月28日~7月31日、天神谷津では、2024年7月15日~7月31日、ハツ堀のしみず谷津では、2024年7月12日、末廣谷津では、2024年7月28日であり、合計で65件の回答を得た。

4.3 アンケート結果および分析

ここでは、環境保全活動への興味および取り組み姿勢別に、谷津の認識の度合いをクロス分析にて把握する。アンケート②については、谷津来訪者の傾向についても分析する。

4.3.1 谷津の認知実態の結果・分析の比較

一般市民と谷津来訪者の両者において、環境保全活動への興味別に谷津の認識度(図3, 5)をみると、興味の有無に関わらず谷津地形はあまり知られていないことが分かった。

取り組み姿勢別にみると、一般市民において、既に活動している層を除くと活動に興味がある人の約61%(41名中25名)は谷津を認知していないことが明らかになった(図4)。谷津来訪者においても、谷津の認識度は一般市民より高いものの、活動に興味がある人の約64%(42名中27名)は谷津を認知していないという実態が確認された。

この結果から、環境保全活動に意欲的な層

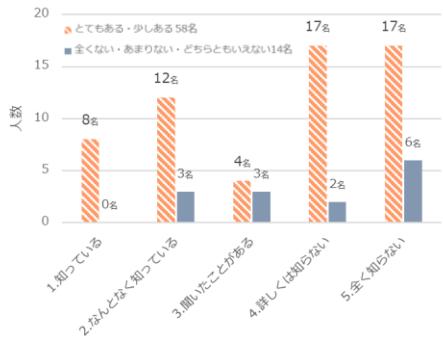


図3 一般市民の谷津認識度(保全活動への興味)

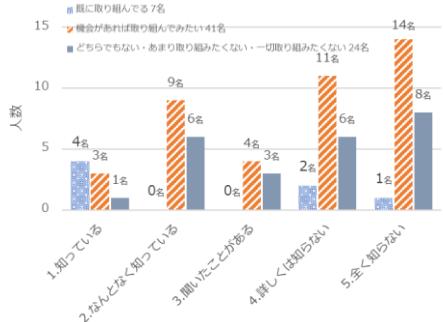


図4 一般市民の谷津認識度(保全活動への取り組み姿勢)

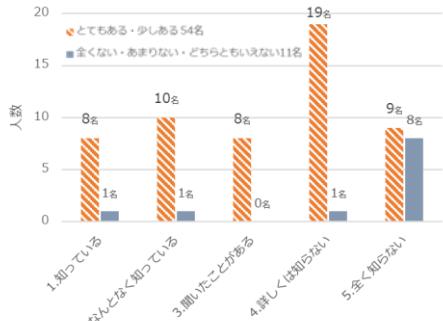


図5 谷津来訪者の谷津認識度(保全活動への興味)

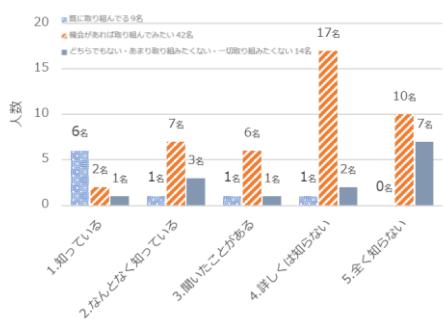


図6 谷津来訪者の谷津認識度(保全活動への取り組み姿勢)

にこそ谷津の認知が進んでいないという決定的な課題が示唆され、認知度向上のための情報提供が喫緊の課題であることが明らかとなつた。

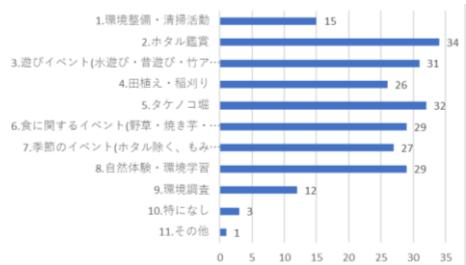


図7 参加してみたい谷津での取り組み

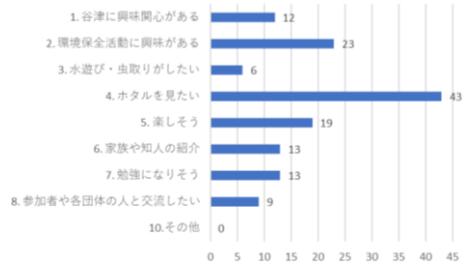


図8 イベントへの参加動機

4.3.2 谷津来訪者における潜在的ニーズ

谷津を訪れる人の傾向として、参加してみたい活動(図7)では、ホタル観賞が最も多く、次いでタケノコ堀り、遊びイベントであった。参加動機(図8)では、ホタル観賞が最も多く、非日常的な体験が大きな動機となっていることが分かった。また、環境保全活動に興味があるという回答も多数あり、参加者には高い環境意識を持つ人々が存在することが分かる。他にも、楽しさや体験価値も重要な要素であることが示唆された。以上より、体験や娯楽といった動機を谷津への関心に結びつける介入の仕組みが有効であると導かれた。

5. 谷津の認知度向上に係る試験的施策実施

5.1 試験的施策の検討・試行

本研究では、谷津の認知度向上を目指し、既存のイベント(ホタル観賞・虫取り・水遊び)を統合したプレイベント「プチ谷津ウォーク2024 夏」を試験的に開催した。開催期間は、おしどりの里(大谷津)では、2024年6月28日~7月31日、天神谷津では、2024年7月15日~7月31日、八ツ堀のしみず谷津では、2024年7月12日、末廣谷津では、2024年7月28日である。以上より、参加者の傾向をアンケートより分析(4章)し、谷津認知度向上施策に活かす。

5.2 谷津認知度向上に向けた課題抽出

前章のアンケート結果から、谷津地形の認知度が低く、特に環境保全活動に興味を持つ人々においてもその傾向が見られることから谷津地形を認知してもらう機会が必要であると考えられる。また、参加者は自然観賞や体験活動に興味関心がある。以上をふまえ、谷津認知度向上施策には、体験的要素、楽しめる要素、教育的要素、交流的要素、参加促進要素の5つの要素を抽出した。

6. 谷津認知度向上施策および成果検証

6.1 谷津認知度向上施策の目的・実施概要

谷津認知度向上施策である、イベント「谷津ウォーク 2024 秋」の目的は、谷津の認知度向上として、谷津の自然や文化を体験し谷津を訪れるきっかけを提供することである。本イベントは、4つの谷津(2章)を巡るウォーキング形式で実施し、計55名が参加した。

6.2 谷津認知度向上施策の企画検討

本イベントでは、企画会議を計6回実施し、タイムスケジュールやプログラム内容を決定した。筆者は、前章で提案した5つの要素を取り入れた2つの企画を実行した。本稿では、紙面の都合上、詳細は割愛する。

6.3 谷津認知度向上施策の成果検証

本イベント申込者を対象としたアンケート③は、2024年10月16日~11月5日の期間に実施し、23件(申込者数62名)の回答を得た。アンケートでは、参加者情報、谷津について、環境保全への意識について調査した。谷津を知らなかった申込者は全体のうち52%であり、谷津を認知してもらうきっかけを提供できた(図9)。

本イベント参加者を対象としたアンケート④は、2024年11月23日~12月23日の期間に実施し、11件の回答を得た。アンケートでは、参加者情報、谷津ウォーク 2024 秋について、環境保全への意識について調査した。イベント前に谷津を知っていた参加者は73%，知らなかった参加者は27%だったが、イベント後は全員が谷津への理解が深まった

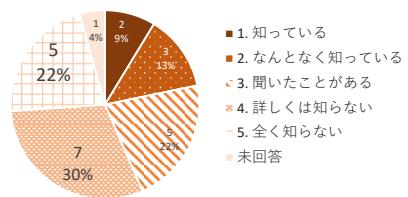


図9 申込時点の谷津の認識

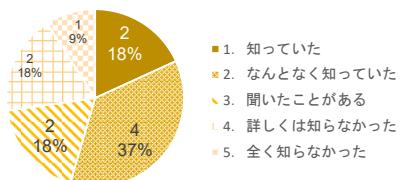


図10 イベント前の谷津の認識

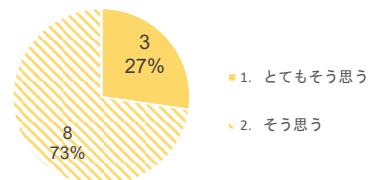


図11 谷津への理解向上



図12 イベントへの参加動機



と回答し、認知度向上が確認された(図10, 11)。参加動機(図12)では、里地里山への関心が最も多く、環境保全や谷津そのものへの興味、食事が参加理由として挙げられた。

本イベントでは、体験的要素として参加者

が谷津を歩き自然に触れることで理解が深まった。楽しめる要素として、各企画が楽しさを提供し、自然に関心を引き出した。教育的要素として谷津に関する知識提供により、関心を高めた。交流的要素では、コメントボード等により理解が深まり、参加促進要素として提供された谷津関連のグッズにより参加意欲を高めた。これらの要素が相乗効果を生み、認知度向上に寄与したと考えられる。

以上より、本イベントは谷津認知度向上に効果的な手法であることが検証された。

7. 結論および今後の展望

本稿の成果を以下に示す。

- ・第4章では、市民の環境保全活動への関心や谷津の認知度を把握し、谷津に対する認識不足が明らかとなった。
- ・第5章では、プレイベントを通じて谷津に訪れる人々の傾向を把握し、認知度向上施策に必要な5つの要素を提案した。
- ・第6章では、施策の試行と成果の検証により、谷津認知度向上に効果的であることが確認された。

今後は、本施策について、行動変容モデルを用いて再評価・分析を行い、市民の行動変容ステージに応じた介入策を設計・検証する。また、コミュニティ形成が参加者の行動意図の維持に与える影響も定量的に検証する。

謝辞：本研究を進めるに当たり、谷津ウォーク実行委員会、富里市役所、末廣農場、国立環境研究所気候変動適応センターの皆様に多大なるご協力を頂きました。記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 西廣淳ほか、「里山グリーンインフラ」による気候変動適応：印旛沼流域における谷津の耕作放棄田の多目的活用の可能性、応用生態工学, 22(2), pp.175-185, 2020
- 2) 自然とかかわり豊かに暮らす 北総地域における里山グリーンインフラの手引き,
https://adaptationplatform.nies.go.jp/everyone/pdf/sky_tanitsu_s.pdf
(最終閲覧 2025.10.10)
- 3) 谷津ウォーク in 富里,
<https://sites.google.com/view/yatsuwalk/>
(最終閲覧 2025.10.10)